

現代と社会システム 第 11 回宿題(7/11 提出)

橋本 翔

環境情報学部 4 年 70347929 t03792sh

ルーマン理論は全体として何から構成され、何を解明しようとしたのか？

ルーマン理論は、「人と人との間のコミュニケーションの理論」と、そこから生まれる「社会秩序の創発の理論」の 2 つで構成される。

この 2 つの規模の間にはカオスが広がっている。ルーマン理論は、その複雑性を縮減するために、社会を一つのシステムとして捉え、それがどのように秩序を持ち、今私達の目の前にある姿になっているのか？を解明しようとした。

ルーマン以前の社会学

それまでの社会学では、パーソンズを頂点とした機能・構造主義的な社会学だった。しかし、個人の動きをとらえきれないという指摘から、現象学的・エスノメソドロジのアプローチを取り入れた社会学が現れてきた。その結果、社会と呼ぶにはあまりに小さな無数の社会学的領域が乱立し、それぞれの研究者の成果がまとめられなくなってしまった。

このミクロ社会学という様な状況をまとめる為にも、社会を一つのシステムと捉えて分析するルーマンの立場が必要になった。

コミュニケーションと、社会秩序の創発

ルーマン以前の社会学では、「個人の行為が集まる事で社会が生まれる」とされていた。しかしルーマン理論は、自己準拠性とオートポイエシスの考えを用いることで、個体の機能、つながり方の構造、そこからの創発が循環的に生まれてくると捉える。システムのその時の姿は、その時の要素が秩序を取っただけの、変化の中の姿だ。

ルーマン理論では、秩序は「コミュニケーション」によって作られるとされる。個体同士が、相手の行為を観測し、意味解釈する事でコミュニケーションが行なわれる。これは「情報が伝達される」のではなく、行為者 A が頭に考えたことを行為で表し、それを観測者 B が観測し、意味解釈しているだけだ。だから、コミュニケーションは意図した通りに伝わらないし、確実に同じ物が伝わったかどうか確かめる方法もない。

意図したとおりに伝わらないコミュニケーションでは、互いに相手の解釈を「期待」する。これは相手が取らざるう行動の可能性がたくさんある事を期待する事でもあるし、自分の取れる行動がたくさんある事でもある。この「期待」の偏りによって、秩序が生まれる。これを「ダブルコンティジェンシー」と呼ぶ。